

## 恐妻家大國

岩崎葉子

テヘランの真ん中のガラス張りの不動産屋。ひっきりなしに客がのぞき込んでいく。私の質問に答える店のおじさんは、ちらちら通りを見ては、にこりともせず、早く終わってくれ、というような不機嫌な顔である。よほど忙しいのかと三〇分ほどの聞き取り調査を終えてそそくさと帰り支度を始めると、おじさんはほっとしたように、前歯の一本抜けたかわいい笑顔を見せた。「あんな、だんなは日本か？」と訊くのでそうだと答えると、「こんなふうにおれと二人で話しているところを見られても問題ないのかね？」。唐突な問いに暫し首をかしげたが、しかし、さつきから彼が妙に落ちつかなくなつた様子によく合点がいった。「女房がよくこの前を通るんだ。冷や冷やものだったぜ」。

このおじさんとはもちろん初対面である。店先でテーブルコーナー片手に話しているところを、まさか浮気現場と見とがめられるなどとは考え難いが、こういう反応の男性は、じつはイランにはたくさんいる。

ある法律事務所を訪ねに行ったら、新婚ほやほやの奥方が部屋の隅にどっか腰を据え、無言の圧力をかけ続けていた。「えーとっご質問の趣旨はこういうことでしたかね」と若き弁護士の声は裏返って

る。民法解説は超スピードで聞き取れないほどだ。いえ私が訊きたいのはそうではなくて……と言いかけるが、空前の眼力をもつて「早く帰りましょうよアナタ」とすぐむ彼女の前にあえなく敗退。「ごめんごめん待たせたね」と奥方を外へ連れ出す弁護士を、私は秘書とともに見送った。

「携帯電話の番号をお教えしましょう。何かあったらいつでもご相談下さい」とある政府系企業の部長が名刺を差し出しながら微笑む。しめしめ、この人を通じて官庁のエライさんに話を聞けるかも、などと期待に胸膨らませる私に、彼は「最初に二回鳴らしたら切つてね。すぐにこちらからかけ直します」とにっこり。一瞬、意味が分からなかったが、どうも携帯に通信記録が残るのを避けているらしい。「妻が見るとやっかいでしょう」。

なぜ私が、そんなふうにごそごそと、あなたの愛人のような真似をせねばならないのか！と腹をたててみても始まらない。彼らが奥方からこよなく愛されている証左か、浮気なんてどう考えてもあり得ない場面・局面で、奥方の影に怯える男性陣は多い。もつとも奥方たちは、何も女性に対してだけ牽制しているわけではない。

世界有数の産油国イランは、業界にお

るタフ・ネゴシエーターとしても知られる。バーレルあたり一セントの上積みをめぐつて、バイヤーと石油省幹部との膝詰め交渉ははや四日目。昨日は椅子を蹴つての決裂に終わり、今朝も早くから再び会議室に詰め状態のスタッツの緊張と疲労は極限に達している。いよいよ億の金が動く交渉は大詰め……。とそこへピロピロリンと呑気な着メロが響き渡る。

「まだ会議なんだよ、本当だよ、……」と席を立ったイラン人石油省幹部は、奥方からの帰れコールに狼狽気味。「ほんとだつてば」。幹部は受話器を耳から離してうるさそうに顔をしかめている。そばにいた他のイラン人スタッツは「またボスから電話、ひひひ」と笑いをこらえる。

この話はさる外国人バイヤーからの伝聞だが、さもありなん。奥方たちは、日に何度も夫の携帯に電話をかけ、動向を窺い、夕飯には何が食べたいかを訊き、帰りに八百屋でジャガイモを買ってくるよう指示する。家庭内の実権は彼女らにあり、男性陣はいかなる理由によつてもその機嫌を損ねぬよう細心の注意を払っているのだ。

恐るべし、イラン（の妻たち）。

（いわさき ようこ／アジア経済研究所

地域研究センター）